

富士山宝永噴火史料集

訂正

これまでにわかった誤りを赤字で修正しました。

76ページは測定地点の確認の参考のために収録してあります。

2026年2月

その他		旧領主	出典
尺	cm		
白き石一二寸、 黒き砂一尺より 二尺餘	軽石 4.5 スコリア45	大久保加賀守	○『宝永四年富士山噴火砂石降りタル舊記録』 相州曾比村劔持定吉氏方藏之寫 渡邊誠道(1917)伊奈氏 贈位欽仰録. p149-150. 同記念誌刊行会. 復刻版(1985). ★ 矢島佳明(1977)宝永噴火と須走(一). 地方史研究 あずまえびす 第十一号, p202. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究, p71.
		大久保加賀守 大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『矢倉沢村砂御見分帳』矢倉沢 田代克巳氏(現 田代均氏)藏 関口康弘(1993)市史研究あしがら, 5号, p37, 38, 47. に引用 南足柄市(2009)南足柄市史6 通史編, p433 (市史研究あしがら, 5号 表を引用)
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』 ○宝永四年十二月『此度富士山焼候ニ付石砂降見分帳』相模国足柄上郡谷ヶ村 武尾家文書 神奈川県立公文書館寄託 (資料ID 2199950974) 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, p45, p116-117.
三尺二寸ならし	96	大久保加賀守	○宝永六年『相模国西郡中山家六ヶ村願帳』山北町谷峨 水野勝弘氏藏 小田原市史 史料編近世Ⅱ 幕領1, p501-503 (史料307).
二尺九寸ならし	87	大久保加賀守	
二尺五寸ならし	75	大久保加賀守	
一尺六寸ならし	48	大久保加賀守	
二尺八寸ならし	84	大久保加賀守	
二尺五寸	75	大久保加賀守	○『二階堂家伝来旧記書』般若院藏 (山北町所在史料目録 第四集, p66, 湯山家文書 No. 1) 足柄乃文化13号 (奥付『足柄之文化』) (1981), p1-56 (影印全面像) 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究, p69-70. (抜粋翻刻) 中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり, p42. 小田原文庫 7. 名著出版 (一部).
二尺五寸位	75	大久保加賀守	
松田村にて二尺位	60	大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○『大地震以来砂降大変覚書』(嘉永七年写 元禄一六年より享保二年までの災害記録) 広町 湯山厚氏藏 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編近世(1), p484-490 (史料195).
		大久保加賀守 大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『今度富士山焼申候石砂見分帳』 神奈川県南足柄市関本自治会 藏 (南足柄市史資料所在目録 第2集, p207, No. 8) 南足柄市(1993)南足柄市史3 資料編近世(2), p184-185 (史料69). 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p414-417 (史料275). 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, p45, p116.
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
一尺五寸より二尺	58	大久保加賀守	○『杉本田造日記』 本多秀雄(1960)南足柄中沼名主杉本田造日記. 足柄乃文化4号, p39-40, 山北町地方史研究会. 瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究, p70(史料3).
		大久保加賀守	○『小田原領砂降積シ見分ノ次第』
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『富士山砂降田畑荒地ニ相成、開発ニ付高反別并人足書上写(後欠) (富士山噴火による降砂片付人足見積書)』塙下 加藤英雄氏藏 (南足柄市史資料所在目録 第1集, p127-175, [村況・戸口] No. 3). 南足柄市(1988)南足柄市史2 資料編 近世(1), p243-244 (史料89). 生沼清治(1990)富士山の噴火と酒匂川, 開成町史研究, 44-58.
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『千津嶋村富士山焼申候石砂見分帳 宝永四年十二月 今度富士山焼申候ニ付石砂降御見分帳 亥十二月十九日』千津島村 瀬戸家文書 明治大学刑事博物館藏
		大久保加賀守	青木美智男(1968)宝永四年富士山噴火・翌五年酒匂川大口堤決壊とその修復をめぐる資料について―旧千津嶋村の場合を中心に―. 史談足柄, 6, 9-53 (史料一). 関口康弘(1993)宝永の砂降以後の酒匂川氾濫について―大口水下六か村農民たちの動向を中心に―. 市史研究あしがら, 5, p46, 47に引用.
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『此度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳』足柄上郡松田町 安藤家文書 神奈川県立公文書館寄託 (資料ID 2199525673)
一尺三・四寸	41	大久保長門守	○宝永七年四月『菖蒲・八沢・三廻部・柳川四か村田畑開発願い』 秦野市史第二巻, 近世史料 1, p438-442.
一尺三・四寸	41	大久保長門守	
一尺三・四寸	41	大久保長門守	
一尺三・四寸	41	大久保長門守	
		大久保加賀守	○宝永四年十二月『此度富士山焼岩砂降田畑目録』曾我谷津 長谷川範氏藏 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p413-414 (史料274).
		(記載なし 大久保加賀守 領カ)	○宝永四年十二月『今度富士山焼申候ニ付石砂降見分帳』宇塚 宇佐美勝朗氏藏 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p411-413 (史料273).
二十三日八ツ過 までに一尺四方 に 一升三合 総計 四五寸	12月16日 14時過ぎ までに 2.7 総計	大久保長門守	○『開発馬飼料麦種買代三色金割符連判帳』小船 船津常治氏藏 船津家文書 (小田原の近世文書目録3, p89, No115) 小田原市編(1989)小田原市史 史料編 近世Ⅱ 藩領1, p408-409 (史料270). 神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川, p46, p114-115.

旧領主名は 郷帳 第十二 相模国(元禄十五年(1702年)提出) (国文学研究資料館藏 史料番号37A-68) による
原史料中 大久保「隠岐守」(忠増)知行 とあるものは、宝永二年九月に「加賀守」(忠増)へ改名したため、
本表中には旧領主名 大久保「加賀守」としてある。
関東近世史研究会(1988)関東甲豆郷帳. (元禄郷帳 相模国 足柄下郡・足柄上郡, p32-36.) に翻刻

表4-2 宝永噴火降下堆積物層厚 相模国足柄上郡・足柄下郡のまとめ

神奈川県		相模国足柄上郡				
地点 番号	現地名	旧地名	宝永四年十二月 柳田九左衛門宛報告		宝永四年十二月・宝永五年一月 『小田原領砂降積シ見分ノ次第』	
			尺	cm	尺	cm
1	小田原市曾比（そび）	曾比村				
2	南足柄市岩原（いわはら）	岩原村			二尺三寸	69
3	南足柄市沼田（ぬまた）	沼田村			二尺三寸	69
4	南足柄市矢倉沢（やぐらさわ）	矢倉沢村	一尺六寸	48	三尺	90
5	足柄上郡山北町谷ケ（やが）	谷ケ村	二尺八寸	84		
6	足柄上郡山北町川西（かわにし）	川西村				
7	足柄上郡山北町湯触（ゆぶれ）	川村 湯触村				
8	足柄上郡山北町山市場村（やまいちば）	川村 山市場村				
9	足柄上郡山北町神縄（かみなわ）	川村 神縄村				
10	足柄上郡山北町都夫良野（つぶらの）	川村 都夫良野村				
11	足柄上郡山北町皆瀬川（みなせがわ）	川村 皆瀬川村				
12	足柄上郡山北町山北（やまきた）	川村 山北			一尺三寸（高西寺村）	39
13	足柄上郡山北町松田惣領（まつだそうりょう）	松田惣領				
14	南足柄市弘西寺（こうさいじ）	弘西寺村				
15	南足柄市広（ひろ）町	猿山村				
16	南足柄市雨坪（あまつぼ）	雨坪村			一尺三寸	39
17	南足柄市福泉（ふくせん）	福泉村			一尺三寸	39
18	南足柄市関本（せきもと）	関本村	一尺二寸	36	一尺三寸（関元村）	39
19	南足柄市狩野（かの）	狩野村			一尺六七寸（狩野一色村）	50
20	南足柄市中沼（なかぬま）	中沼村				
21	南足柄市塚原（つかはら）	塚原村			五六寸麦 作見ゆる	17
22	南足柄市壺下（まました）	壺下村	一尺六寸	48		
23	南足柄市千津島（せんづしま）	千津嶋村	一尺九寸	57		
24	足柄上郡松田町寄（やどりぎ）	萱沼（かやぬま）村	一尺五寸	45		
25	秦野市三廻部（みくるべ）	三廻部村				
26	秦野市柳川（やながわ）	柳川村				
27	秦野市八沢（はっさわ）	八沢村				
28	秦野市葛蒲（しょうぶ）	葛蒲村				
神奈川県		相模国足柄下郡				
1	小田原市曾我谷津（そがやつ）	曾我谷津村	六寸五分	20		
2	小田原市永塚（ながつか）	永塚村	五寸五分	17		
3	小船村	小船村				

宝永四年十二月・宝永五年一月『小田原領砂降積シ見分ノ次第』出典

『大久保忠増記』（坤巻）東京大学史料編纂所蔵（写本）（請求記号 2044-194）「忠増御筆拝領并献献上物并小田原領砂降シ事 小田原領砂降積シ見分ノ次第」

神奈川県立歴史博物館(2006)富士山大噴火 宝永の「砂降り」と神奈川県、出品リスト47, p44, p115-116.

小田原有信会編(1931)近世小田原史稿本 下巻2（小田原市立中央図書館蔵 請求記号E-01-02）

瀬戸崎雄(1982)金井島村の研究, p72-73(史料11).

芹沢嘉博(1975)富士山噴火の被害とその再開発—小田原藩御領を中心の一, 小田原地方史研究 7, p40-52.

中野敬治郎(1978)近世小田原ものがたり, 40-41. 小田原文庫 7. 名著出版（一部）.

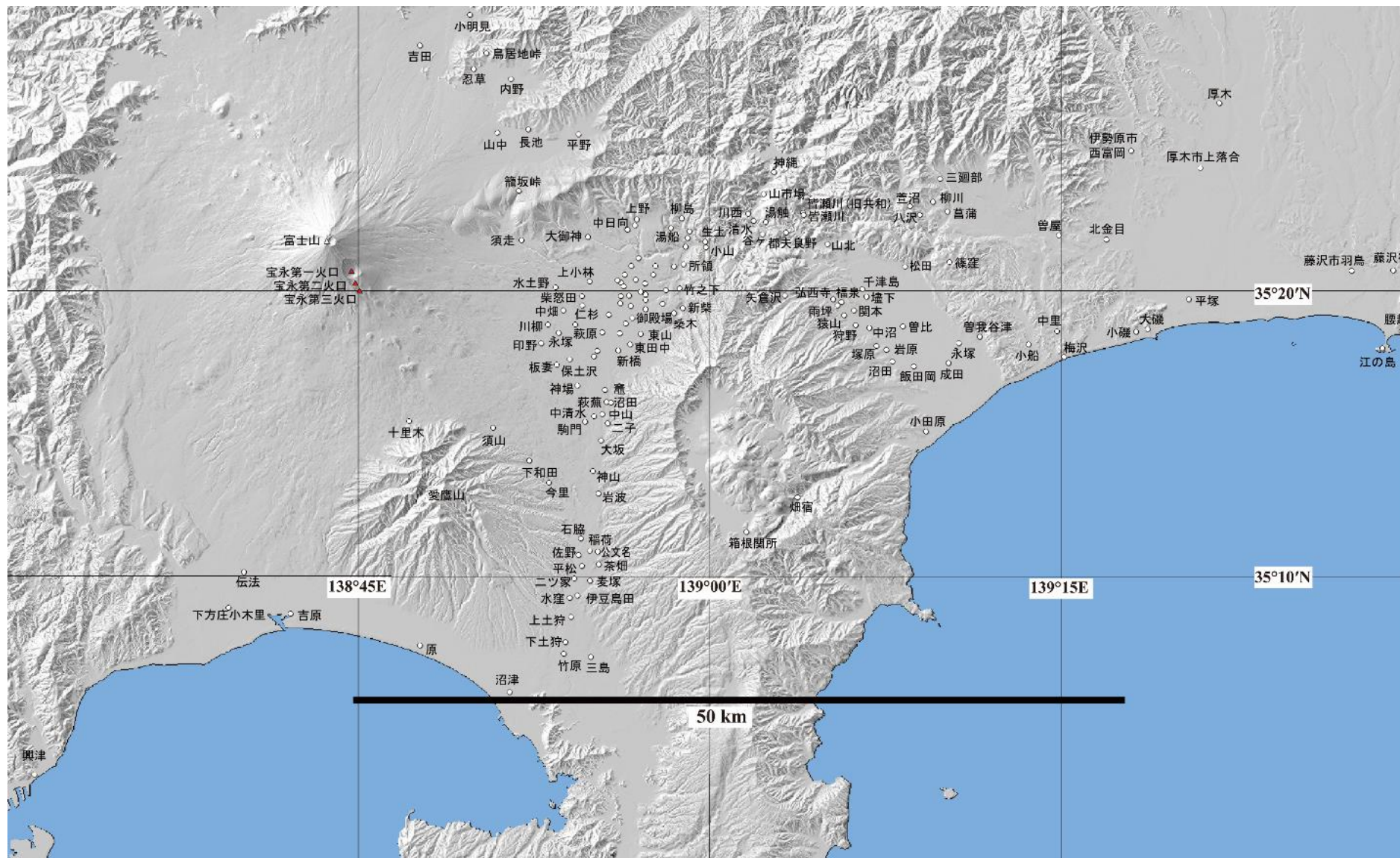


図 4-2 (a) 富士山宝永噴火 駿河国駿東郡・相模国中・西部降砂層厚報告地点

附録史料1 『富士山自焼記』（東京大学史料編纂所謄写本）

（表紙）

「富士山自焼記 完」

一、宝永四丁亥年十一月廿二日より厚曇、廿三日弥曇
廿三日晝過より天一枚に赤曇、白キ灰降事雪
の降ことく、其後黒キ焼砂降事夜中六寸程
積ル、廿三日未刻より夥敷震動有之、夜中無不止
屋なり不輕、廿四日終日日之光を覆、一天闇、震
動雷光無止時、西ノ刻地震甚敷、終日焼砂降、往
来之諸大名、旗本、雨天之時の更く供廻りハ合
羽笠を着、乗物には桐油を懸、歩行人ハ笠菅笠
ならてハ通かたく、砂目に入、口に入、息を突かね
井水ニハ覆をして砂を防、風吹時は一問先も不
見、廿五日須臾も日不出、一天赤ク曇リ、震動雷電
無止時、黒砂之降事晝而不止、夜ニ入て震動甚強
く灰砂降事弥多し、屋柵に積りたる砂又は
往還之道、鍬を以かきよせ、俄江戸中大手をな
す、廿六日震動少間遠ニ成、雷も時々鳴、南の方ハ
薄く晴、北ノ方ハ黒雲墨のことし、砂降事前日同
し、往来之人雨具着事于今不止、是只事に非すと

萬人興を醒す、

廿六日往来の飛脚宿を書付出す、書面如左、上方
より罷下候飛脚之者共申口上之覚、

一、廿二日未刻、豆州三嶋、駿州吉原へ着仕候處、致腹
痛、同道之者先へ通し、彼宿ニ滞留仕候處、申ノ刻ハ
夥敷地震いたし、翌廿三日昼黒雲覆、家内之外ハ
不及申ニ、家之内迄闇に成、大地夥敷ふるひ、食物
を調候鍋も釜も踊上り、天地も只今打返すかと
宿中之男女暗さげび申候、腹痛やミ不申候得共、
家内之者共退候故、不及是非彼宿を出申候、

今屯人申口

一、廿二日夜中、足高山の方火之玉飛上る事数を
不知、又長刀の形なる長き火十飛上り、或十間
も有へき程の長さ火直ニ立登り、人皆肝を消、見
物仕候、扱又震動之夥敷事無云尽候、廿三日富士
山焼出候以後火炎黒雲と成、山も不見、手頃の石
雨の降更く、箱根方上方之宿々騒動ハ詞に不及、旅
人に宿を借事ハ勿論、給物一切無之、海の面潮も
一丈も高くなり光渡り、震動強、歩行も難成程

谷川も降埋申候^而有之在々水濁り申由二候、

一、降積り候石ハ輕石のことくにて大サ大圖壹寸四

方式寸四方程ニ相見へ申候、

一、道中筋之儀、段々注進申上候通ニ御座候、田畑之

石砂大分積り麥作ハ勿論透と無之、百姓難儀

仕候由ニ御座候、焼候近所ニ三里ハ火焰強、烟と相

見へ候得とも悉石砂降、寄付レ不申候、

右之通ニ^而外替り申風聞承不申候、以上、

徒目付

市野新八郎

亥十一月晦日

安田藤兵衛

馬場藤左衛門

〔富士山南麓から見た図あり 図中の説明文〕

駿府御目付

溝口源兵衛殿ヨリ以繪圖

注進の寫十一月廿五日飛脚

到来之由

三くりや十里幾^々村^々檜たいらと申

所駿河表方富士詣之道方

東郡内と駿河と之間

檜たいらと申邊方焼出

申候、木立ハ無之所之由、

十一月廿二日方廿三日四ツ時迄地震々動雷光

夥數百千ノ雷晝夜止時無之、廿三日巳之

刻ヨリ大火發申候而地震々動ヨリ夥ク

鳴申候、焰ノ勢イハ富士之頂ヨリ遥ニ高ク

富士郡中ハ闇夜ノ如ク成申候

三くりや十里キ村ハ小田原領ノ由、傳法村ハ

曾我播磨守殿安藤内記殿杉浦平九郎

知行所之由、傳法村方焼出候所へハ指

渡してハ四里程有之由

二度目之檢使注進之繪圖

如左

〔富士山南麓から見た図 図中に村、街道、領主の記載あり〕

〔富士山南麓から見た図 図中に村、街道、領主の記載あり〕

へしと觸在之、鹿嶋領の貴賤、廿三日を
心元なく相待處に、神勅の通り、廿三日
昼時より砂降、其上鹿嶋の海端^{江山}

中の鹿数百疋、頭を海表へならへ集り

居けるほとに、百性とも此よしを見て、

扱は神と鬼との御合戦とミへたり、御

味方可仕とて、老人・小兒によらす、男たる

分ハ鑓、長刀、刀脇指ぬき持、弓に矢はけ、

彼鹿あつまり居ける邊へ押寄、たへす

鯨波をわけ、いよいよ祈願いたし侍るに、

一時計も過て、降砂の中に獣の毛交り

降る、長さハ七八寸も有しとかや、^{但、江戸にて}
^{も砂に交り}

降りたる毛をひろいし者数多
^{有之、色ハ薄赤も白きも有よし} 右の毛降来時、数

百疋の鹿とも閑に山へ引入る、百性共此ヲ見

て、扱ハ神力加護を得たり、此うへ砂は幾

尺積るとも不苦、目出たしとて、神

哥・田舎哥を謡、己か家々に帰ると也、右

神勅の奇瑞、百性より地頭くゑ^(江)住進^(江)

し侍れハ、内々にてハ尊敬かきりなしと

いへと、世間を軽りてやありけん、隱密のよし、

一、廿五日、公儀御役人衆へ駿^(州)劔^(州)の百性より

注進申上ル文言ハ、

昨廿二日昼八時方今廿三日五ツ半時迄之内、
地震無間も、三十度程震、少々残候半

潰之家、又候震潰申候、其同日四時、富士

山夥敷鳴出、其上雷、富士郡中^{江鳴}

渡り、大小之男女共絶入仕候者多御座候

得共、死人ハ無御座候、同山雪之流、煙卷

出、猶以、山・大地共に一遍之煙、二時計うす

まき申候、如何様之儀共^不奉存、人々^(途)十方

失罷在候、昼之内ハ煙計相ミへ候、暮六時

より右之煙、皆火煙と相見へ候、此上如何

様之儀ニ可罷成も不奉存候、右之段、乍恐

御注進申上候、以上、

駿^(州)劔^(州)富士郡

十一月廿三日

吉原 問屋

年寄

右之通、駿^(州)劔^(州)吉原宿方、宿次を以、只今

注進仕候間申上候、尤御代官能勢

権兵衛方方未何共不申来候、以上、

十一月廿五日

安藤筑後守^(重志)(大目付)

石尾阿波守(目付)